

ダウトゲーム

五十嵐貴久

第四回

11

品川駅に向かって歩きながら、志郎しろうは暗い笑みをかみ殺し、何も残っていない、と手のひらを見つめた。

入ってきた二人の警官に取り押さえられ、取調室から連れ出された。待機を命じられ、一時間ほど経った時、小会議室に呼ばれた。

「弁護士を呼べ、と村川むらかわは言ってる」今時、どんな馬鹿ばかでもそれぐらいの知恵はがあると藤元ふじもとが吐き捨てた。「弁解のしようがない。ただじゃ済まんだろう」

「申し訳ありません」

「村川は弁護士を指定している。どういう関係かわからんが、親しいようだ。調べたが、面倒な相手だぞ。記者会見を開くことになるかもしれない。あつと言う間に暴力刑事の烙印らくいんを押される」

「でしようね」

お前が良くてもこっちは困る、と藤元が苦笑した。

「トラブルになる前に処分を下す。無期限の謹慎きんしんだ。連絡が取れる

ようにしておけ。警務部が事情を調べることになるだろう。おれはそんなに偉くない。お前を守るかどうかかわからん」

「無理しなくていいですよ」

「放っておくわけにもいかんだろう。とにかく家に帰れ。捜査からは外す。馬鹿野郎が」

その場で警察手帳を預けた。手錠や拳銃けんじゆうは携行していないから、渡すのはそれだけだ。ご迷惑をおかけしました、と志郎は頭を下げた。

「奴の鼻を折ったのか？」

藤元の問いに、たぶん、とうなずいた。

「もし折れてなかったら、俺が折っておく」

行け、と肩を押されて、そのまま署を出た。悪い上司じゃない、と苦い笑いが浮かんだ。

紀子のりこは自分の部屋から電話をかけてきた、と歩きながら考えた。十一時過ぎの時点では、間違いなく自分の部屋にいた。

その後、外部から電話が入り、ジャケットを着て、警察手帳をバッグに入れた上でコンビニの駐車場へ向かった。

前から決まっていたことではなかったはずだ。だとしたら、自分の会話で触れただろう。公衆電話からの連絡を受けて外へ出た、としか考えられなかった。

深夜十二時近い時間だった。よほど重要な用件でなければ、呼び出しに応じるはずもない。誰に、何と言われて呼び出されたのか。

この一週間ほど、品川桜署管内で大きな事件はなかった。ルーテインの仕事はあったが、高村の自殺について調べていたぐらいだから、紀子が忙しかったはずがない。

原則として、刑事は二人一組で動く。単独行動はめったにしない。ただ、事件として認知されていない場合は、その限りではない。

高村のケースはそれに当てはまる。

紀子は何を調べていたのか。最後の電話で話した時のことを、雑踏の中を歩きながら思い返すと、春野博美はろのひろみという名前が頭に浮かんだ。

署に來たと言っていたが、紀子が一人で会っている。その時、不審しんに思うような何かがあったのかもしれない。

内ポケットの名刺入れを見ていくと、上から五枚目に春野裕美の名刺があった。勤めているナグー音楽事務所という社名と、直通と携帯の二つの番号が記されている。

携帯に電話をかけると、もしもし、というやや低い声が出た。

「春野さんですか？ 品川桜署の橋口はしぐちと申します。一度お会いしているんですが、覚えていらっしゃいますか？」

はい、と裕美が答えた。

「すみません、今、打ち合わせ中で……」

「伺いたいことがあります。打ち合わせはどれぐらいで終わりますか？ よろしければ、直接お会いして話を聞きたいのですが」

「それでは……一時間後でも構いませんか？」

結構です、と志郎は名刺の住所を確認した。港区芝浦しほり、と記されている。

「では、一時間後に会社へ伺います」

お待ちしています、と裕美が電話を切った。志郎は品川駅へ向かった。

12

春野博美の会社、ナグー音楽事務所は港区芝浦のウォーターフロントにあった。イベント会社というからバブリーなオフィスをイメージしていたが、古い倉庫を改造しただけの小さな建物だった。

受付などもなく、電話が一台あるだけだ。内線表を見て春野という名前に電話をかけると、すぐに博美が正面のドアから出てきた。表情が暗いのは目の隈くまのせいだろうか。

こちらへどうぞ、と博美が二階フロアの会議室へ向かった。そこ広いが、打ちっ放しの壁が時代を感じさせた。

「お座りください。お茶でも……」

結構です、と志郎は首を振った。

「お忙しいようですね」

「イベント会社は自転車操業なんです。昼も夜もありません」博美が自嘲気味じちやうに小さく笑った。「あの、ニュースで見たんですが、妹さんが事故に遭あわれたというのは……」

「紀子は亡くなりました」

志郎は小声で答えた。驚きました、と博美がうなずいた。

「ニュースでも、そんなふうには報道されていましたが、信じられなくて……先週の木曜、品川桜署へもう一度行って、紀子さんと会ったんです。高村さんの件で、改めて話そうと……」

紀子から聞きました、と志郎はうなずいた。

「何を話したんです？ それを聞きたくてお伺いしました」

高村さんの死は自殺ではないとお話ししました、と博美が答えた。

「あたしと高村さんとの関係や、もっと細かい事情を説明して……」

高村さんに自殺する理由はないと、紀子さんはわかってくれました」

やはり、とうなずいた志郎に、あたしたちはうまくいっていたんです、と博美が言った。

「結婚の約束もしてましたし、お互いの親や親戚を紹介することも決まっていました。それなのに、自ら命を絶つなんて考えられませんか」

紀子が信じたのは、裕美の言葉に説得力があったからだろう。

「ですが、話しているうちに自分でもわかったことがあります。

あたしは高村さんについて、よく知らないことが多かったかもしれないと……」

一年半ほど交際していたとおっしゃってましたね、と志郎は質問を始めた。

「それなりに長い時間です。でも、高村さんのことをわかっていなかった。そういうことですか？」

「東悠大学とうゆうを卒業して、今の会社に入ったのは聞いています。でも、中学や高校の話、もっと前に溯さかのぼって、子供の頃の話を知ったことはありませんでした。ご両親のお仕事とか、その辺りも……裕福ではなかったとか、そんな話を何度か聞いたぐらいです。ご両親を早くに亡くされて、苦労していたのは何となくわかりました。話したくないのは、そのせいだろうと思っていたんです」

「兄弟もないし、親戚も少ないと片山興産かたやまの総務部長に聞きました。それを考えると、話したくなかったのはわからなくもありません」

そうかもしれませんが、と裕美が首を傾かしげた。

「普通なら、もう少し話してくれたんじゃないかって……大学時代の友人を紹介してもらったこともありません。わたしは自分の仕事

の話をすることも多かつたんですけど、彼は忙しいとか、大変だとか、漠然ぼくせんとした話しかしませんでした」

「なるほど」

彼のことかわからなくなって、と裕美が頬に手を当てた。

「とても優しい人だったんです。男らしくて、誠実で頼れる人だと思っていました。信じられる人だと……でも、あたしはあの人のことをどこまで知っていたのか……生まれも育ちも、どういう人生を歩んできたのかも、確かなことは何もわからないんです」

調べてみましょう、と志郎はスマホで検索を始めた。

「東悠大学、学生課……さすがは天下の東悠大ですね。学生課といっても、担当が分かれています」

一番上にあつた番号に電話をかけて、品川桜署の橋口刑事と名乗り、高村良雄よおという卒業生について調べていると話すと、しばらくたらい回しにされたが、最終的に教務課という部署に回された。そこが担当だという。

「こちらは品川桜署刑事課橋口巡查長です」そちらの卒業生で高村良雄という男性のことを調べています、と志郎はあえて高圧的に言った。「連続殺人事件の被害者の可能性があります。至急お願いしたいのですが……」

「それは個人情報ですから、お答えできません」

切り替えたスピーカーホンから、くぐもった男の声がした。

「裁判所命令が出ていても？ そちらにファクスはありますか？
今すぐ送ります」

ブラフだったが、効果があったようだ。待ってください、と男が慌てたように言った。

「何があったんです？ 先週報道されたあの事件？」

「そういうことです」

先週、荒川区内で連続殺人事件が起きていた。既に犯人の目星はついていているというが、勝手に勘違いしているなら、訂正する必要はない。

「東悠大の卒業生が狙われているという情報があります。在校生の可能性もないとは言えません。あなたが情報を秘匿ひとくしたために殺人が起きたら、責任問題になるのは——」

「何を聞きたいんです？」

「高村良雄さんは東悠大に在籍していたか、その確認です」

「それぐらいなら……お教えしても構わないかと」男がおもねるように言った。「タカムラヨシオという人物の卒業年度はわかりますか？ 学部は？」

「年度はちよつと……現在四十歳ですから、十七、八年前でしょう。

学部は……」

商学部と聞いています、と裕美が言った。男がパソコンのキーボードを叩く音がした。

「タカムラヨシオ……高村光太郎たかむらこうたろうの高村、良い悪いの良、加山雄三かやまゆうぞうの雄ですか？」

「そうです。高村さんは東悠大の卒業生ですか？ もうひとつ、出身高校を知りたいのですが」

殺人事件と学歴は関係ないが、男は何も言わなかった。捜査に必要だと思ったのだろう。

「ええと、高村良雄、昭和五十六年生まれ。平成十六年本校商学部しょうがくぶに入学。本校に在学していたのは間違いありません。熊本県諫妻高校いんづま卒となっていますが、他に記載事項はありません」

「ご協力ありがとうございましたと言った志郎に、ですが、と男がからせき空咳をした。

「この方、高村さんが連続殺人事件の被害者ってことはないですよ」
電話を切ろうとした志郎の指が止まった。

「どういうことですか？」

「高村良雄さんは七年前の六月に亡くなっています。大学に連絡がありました」

「東悠大では卒業生が死亡すると、連絡しなければならないんですか？」

高村さんは奨学生しょうがくせいだったんです、と男が言った。

「奨学金の返済が途絶えていたため、担当者が問い合わせると、亡くなられたと連絡があったんです。奨学金には特約制度があって、死亡した場合、支払いの義務はなくなります。記録が残っていますから……あの、本当に警察の方ですか？」疑うように男が言った。「高村良雄が殺された可能性があると言っていましたよね？ 刑事なのに、亡くなっているのを知らないのは——」

無言で志郎は電話を切った。どういうことでしょう、と博美がまばたきを繰り返した。

「高村さんが亡くなっている？ そんな馬鹿な……」

同姓同名の別人という可能性もあります、と志郎は首を振った。

「珍しい名前とは言えません。詳しく調べないと、憶測になります。

正式な手続きを踏んで——」

そんな偶然そつであるでしょうか、と裕美が視線を逸そらした。

「同姓同名で年齢も学部も同じ？ 高村さんが片方は七年前に亡くなっていて、片方は自殺した？ 考えられません」

確かに、と志郎は肩をすくめた。偶然にもほどがあるだろう。

「片山興産に連絡してみましよう」

番号を押すと、すぐに相手が出た。品川桜署の橋口ですと志郎は言った。

「桑山部長はいらっしゃいますか？」
くわやま

「ああ、わたしですよ」桑山です、と明るい声が聞こえた。「先日はわざわざ……」

「あの後、少し調べてみたんですが」

何をでしょう、と桑山が言った。

「ちよつと教えていただきたいことがあります……高村さんのことなんですが」

「ええと、今から会議がありまして……長くなりますか？」

「高村さんの経歴を確認したいんです。会社に履歴書がありますよね？ ファクスしていただけると助かるんですが」

「構いませんが、どうなんでしょうか？ 個人情報ですし、わたしの一存ではちよつと……」

語尾が尻つぼみになった。では、後ほど伺います、と志郎は言った。

「他にも確認したいことがありますので……」

「わかりました。法務の担当者に確認を取っておきます。大丈夫だと思っんですが、手続きは踏んでおきませんか。何時頃お見えになりますか？」

「三時でどうぞでしょう」

お待ちしています、と桑山が電話を切った。どうするんですか、と

博美が目だけで聞いた。

「片山興産を調べてみます。その方がいいようだ」

志郎は自分の名刺にスマホの番号と、念のために自宅の住所を書いて博美に渡した。

「何かあれば連絡してください」

自分も住所を名刺に書き込んだ博美が、高村さんは自殺なんかしていませんとつぶやいた。紀子もそう考えていたようです、と志郎は立ち上がった。

「また連絡します。ところで……あなたは一昨日の深夜十二時ぐらいに紀子に電話をかけていませんか？ 公衆電話からなんですが」

「公衆電話？ いえ、かけてません。だいたい、電話するなら、自分の携帯を使います」

今時、公衆電話を使うのは相当な変わり者か、何らかの事情がある者だけだ。博美はそのどちらでもないだろう。

会議室を出て、出口に向かった。振り向くと、薄暗い照明の下で博美が頭を深く下げていた。

13

こちらが高村部長の現況報告書です、と桑山が会議室のテーブルに二枚の紙を載せた。

「年に一度、提出が義務付けられています。もう一枚は入社時に本人が書いた履歴書です。十八年前のもので、捜すのに苦労しましたよ」

午後三時過ぎ、志郎は片山興産総務部に着いた。桑山と会議室に入ったが、お茶は出なかった。歓迎されているわけではないようだ。

「何を調べていらっしゃるんですか？」桑山がテーブルの上で両手の指を何度も曲げては伸ばした。「熱心なのはわかりますが、高村は自殺したわけですから、後はわたくしどもに任せていただければ――」

平成十六年、東悠大学を卒業と記載があります、と志郎は書類を指さした。

「二十二歳ということは、現役で入学し、留年もしていなかったんですでしょうか？」

そうだと思います、と桑山が答えた。

「東悠大を卒業したのは、本人からも聞いてます。ですが、浪人とか留年とか、そこまでは覚えてませんよ」

「この履歴書には、高校や中学の出身校について記載がありません。どういうことでしょうか？」

昔とは違いますよ、と桑山が苦笑した。

「警察は詳しく書かなきゃならないでしょうけど、企業は違います。コンプライアンスの問題があって、出身とか学歴を細かく聞くのは

タブーなんです。いろいろ難しいんですよ……橋口さんは同僚の方がどこの中学出身とか、そんなことが気になりますか？ いちいち聞いたりますか？」

「警察官が身元を厳重に確認されるのは、やむを得ないと言いますか……」

「あなたご自身は？ 同じ部署の方の出身地とか、中学校の名前をご存じですか？」

志郎としても、首を振るしかなかった。刑事課で一番親しい南部が横浜生まれで、修日大を卒業したのは知っている。だが高校や中学、子供の頃は詳しく知らなかった。

志郎も自分の出身地については、大体のことしか話したことがない。藤元係長、刑事課の他の同僚も似たようなものだ。何か理由がない限り、その辺りに触れないのが常識になっている。

「会社の人間関係なんて、そんなものですよ。よほど親しければ別でしょうけど、なかなかそこまでは話さないんじゃないですか？」

「本籍が熊本になっていますが、それについて高村さんは話していませんでしたか？」

「どうですかね……いや、熊本出身だというのは聞いた事がありますよ。彼は見るからに九州男児という風貌をしてましたからね。そうだろうと笑った記憶も……ですが、深い話をした覚えはありません」

せん」

「あなたが聞いていないのはわかります。部署が違いますからね。ですが、営業部の同僚や部下の方なら、知っているのでは？ 話を聞くことはできますか？」

「今日は営業の連中が全員出払ってしましてね」桑山が薄くなった額を押さえた。「大きな現場が二件重なっております……」

「前もそうでしたね。今日もですか？」

民間会社に社員を遊ばせておく余裕はありませんよ、と桑山が皮肉めいた言い方をした。

「営業マンが社内で油を売っているようじゃ、仕事になりません。公務員とは違うんです」

「では、親しかった方を教えていただけますか？」

さなだ 真田社長とお話いただけますか、と桑山が立ち上がった。

「高村部長は部下に何でも話すような性格ではなかったと思います。プライベートについて詳しいのは、直属の上司である社長でしょう」営業部フロアに向かったが、桑山の言葉通り、そこには誰もいなかった。奥の社長室をノックすると、どうぞという声が聞こえた。

「ああ、刑事さん……橋口さんでしたね」

どうぞお座りください、と笑みを浮かべた真田が来客用のソファを指した。

「桑山部長、君もこちらへ……先ほど、彼から報告がありました。高村くんの件を調べているそうですね？ 彼の経歴を知りたいとか」

高村部長の履歴に曖昧あいまいな点があります、と志郎は言った。

「確認を上から指示されました……」

「不明な点がひとつでもあると気持ち悪いですからね」真田が首をゆっくり振った。「ですが、私も高村くんの履歴を詳しく聞いたことはないんですよ」

「そうなんですか？」

提出された履歴書以上のことは聞いていないという意味です、と真田がうなずいた。

「思想信条、政治的なスタンス、宗教とか、そういう話はできません。昭和の頃とは違います。どこかで線を引かざるを得ません」

「部下でも、プライベートなことは聞けないと？」

「例えばですが、彼が結婚していない理由を突っ込んで聞くわけにはいきません。どうしてだ、と軽い気持ちで聞いても、それがパワハラだと言う者もいます。今はどこの会社も似たようなものでしょう。トラブルになりかねませんからね。仲が悪いか、そういう意味じゃありませんよ。昔とは違うってことです」

「飲み歩いて終電がなくなったら、お互いの家に泊まり合うような

ことは……」

今の若い連中が一番嫌うのはそれです、と桑山が笑った。

「電車がなくなるから帰ります、と彼らのはつきり言いますよ。その方がお互い楽ですしね。あなたはどうです？」

そうかもしれませんが、と志郎は言った。年齢が同じで、親しい南部の家に泊まったことは何度かあるが、他の同僚の家には行ったことさえない。

藤元の娘の話はしょっちゅう聞かされていたが、実際に会ったことはなかった。志郎だけではなく、他の者も同じはずだ。

「社内の人間関係は把握はあくしてはいますが」高村くんのプライベートな交友関係はまったく知りません、と真田が肩をすくめた。「しかし、そういうものじゃありませんか？ 高校時代の友人を、働いている職場の同僚に紹介しますか？ ないとは言いませんが、レアケースでしょう」

認めるしかなかった。出席した同僚の結婚式で、先輩警察官から昔の友人を紹介してもらったことはあるが、連絡を取り合うわけではない。

休日に友人と飲んでいて偶然同僚などと出くわせば、もちろん紹介するだろうが、それだけのことだ。

個人的な人間関係を会社に持ち込む者が少なくなっている。ある

としても仕事絡みだ。

親友だからという理由で、友人を会社に連れてくることはできない。そういう時代になっていた。

「ではもうひとつ、高村さんは品川に住んでいましたよね？」志郎は紀子が口にしていた疑問をぶつけてみた。「こちらの本社までは遠いと思うんですが、なぜ彼だけ品川だったんですか？」

話してなかったのかと視線を向けた真田に、説明したつもりだったんですが、と桑山が口を開いた。

「弊社の最大手のクライアント、寺門建設てらかどさんの本社が京急けいきゆうの平和島へいわじまにありまして、うちとしても手厚くフォローしなければならぬ相手です。高村部長は週に二、三回は通っていました。直行直帰も珍しくなかったので、品川にも部屋を借りていたんです」

「あの部屋に住んでいたわけではない？」

「毎日ではありません」

「では自宅はどちらに？ お住まいは——」

「ここですよ、と真田が窓の外を指した。

「寮があるんです。社員の多くはそこに住んでいます。仕事には便利なんです。通勤のアクセスが悪いという欠点があるので、土地は余ってますし、それなら寮を作ればいいと思ひましてね。家賃が安いので、なかなか出て行く者がいないのが悩みの種なんです」

もつと早く話しておいていただきたかったですね、と志郎は眉間に皺しわを寄せた。

「私物もあるんですね？ 調べないわけには……」

申し訳ありません、と桑山が頭を下げた。

「こちらでも動転していたもので、その辺りのことまで気が回らなかつたと言いますか……それに、高村部長は月の三分の二ほど品川で暮らしていましたし、住民票もあちらに移しています。実質的にはあそこに住んでいたと言っても、間違いじゃないんですよ」

一応調べることになると思いますと言った志郎に、もちろんですと桑山がうなずいた。

「ただ、今日でなくてもよろしいですよね？ こちらも忙しくて、立ち合える者がいないんですよ」

なるべく早く連絡します、と桑山が何度も頭を下げた。志郎も停職中だから、今すぐというわけにもいかない。

手配しますとうなずいた真田が、他に何かありますかと腰を浮かせた。

「今から銀行と打ち合わせなんですよ。融資ゆうし交渉で、タフな話になるでしょう。その準備があるので、この辺でよろしいですか？」

質問したいことはまだあったが、急ぎではない。また伺いますと言って、志郎は席を立った。お送りしましょう、と真田が並びかけ

た。

敷地が広いですね、と階段の窓から志郎は外を指さした。

「山を丸ごと購入されたわけですか？ あの建物は社員寮だったんですね……何だろうと調べていました」

社員の半分以上を住まわせております、と桑山が答えた。

「最初はもう少し小さかったんですが、増改築を繰り返しているうちに今の形になりました。団地一棟ぐらいいはあるでしょうか」

「奥にあるのは……あれも寮ですか？」

少し離れたところに建てられている大きな建物に目をやった。外観は粗末そまつな造りで、倉庫に近い感じがした。

予算の問題もあって、最低限のことしかできなくて、と真田が階段を降りた。

「仮設の寮です。来春までには建て直すつもりなんですが」

表に出ると、通用門から入ってきた数台の大型トラックとすれ違った。敷地の奥に広大な駐車スペースがあり、そこへ向かっている。

来た時は気づかなかったが、二十台ほどが停まっていた。すべてカバーが掛けられている。

「ここに本社を置くことにしたのは、土地の有効利用が可能だからです」

トラックを眺めていた志郎に真田が声をかけた。

「うちの会社のメリットとして、本社にすべての資材や車両を置けるということがあります。いざ工事が始まるという時には、ここからすべてをスタートできるわけです。便利ですし、スピード重視はどここの業界も同じでしょう」

資材置き場まであるんですか、と志郎は辺りを見回した。

「どこです？ 鉄骨とかコンクリートですか？」

「山の裏手になります。二束三文とは言いませんが、東京とは思えないほど格安で購入できましたよ」

「メリットはわかりますが、この辺だと買い物が難しいんじゃないですか？ 社員の食事はどうしてるんです？」

その辺は適当に、と小さく笑った真田が建物の中へ戻っていった。社長はやり手でしてと言った桑山に、わかりますよ、と志郎はうなずいた。

「警察にもああいう方が欲しいぐらいです……では、失礼します」

振り向くと、ポケットから携帯電話を取り出した桑山が話しながら頭を下げた。

「すいません、ひとつ忘れていました」 志郎は大声で呼びかけた。

「ぼくの妹……橋口紀子刑事はこちらにお邪魔していませんでしたか？」

いえ、と手を振った桑山が背を向けた。間違いありませんか、と

もう一度聞いたが、答えはなかった。

もういいでしょう、という声が聞こえたような気がして、志郎は苦笑いを浮かべた。

14

片山興産の前でタクシーを呼んだ。村の税務署へ行ってくださいと頼むと、うなずいた運転手がアクセルを踏んだ。

思いつきだったが、村にとって片山興産の存在は大きいはずだ。

この村に本社を置く企業は少ないだろう。六百人規模の会社は一家社だけかもしれない。税務署員に詳しい事情を聞くつもりだった。

二十分ほど走ると、五時前に姫原村税務署ひめはらむらに着いた。窓口に座っていた中年の男に名刺を渡し、品川桜署の橋口巡査ですと名乗ると、ご苦労様ですと立ち上がった。

片山興産のことなのですが、と前置き抜きで志郎は本題に入った。

「その社員が自殺したため、事情を調べています。詳しい方はいらっしゃいますか？」

うちの人間なら誰でも知ってますよ、と男が笑った。

「本社を置いてますからね。この村で百人以上の社員がいる会社は数社だけです。わたしでもわかると思いますよ」

「この村に登録しているんですね？」

「そうです」

直接の担当ではないと言うが、片山興産について詳しいようだ。過去に何か問題はなかったかと聞くと、まったくと男が首を振った。

「税務関係に不備はありません。あれば、すぐにわかります」

「そうですか」

「法人税もきちんと納めてます。この二年ほどは、なかなか大変なようですがね。業績が良くないんでしょう。売上が落ちているのは確かです」

「売上が落ちている？」

館山たてやまさん、と男が奥に向かって声をかけた。

「こちら、警察の方。片山興産の件で聞きたいことがあるらだつて」

「どうしたの」同年配の男が近づいてきた。「何？　トラブル？」

そうではありません、と志郎は言った。

「その会社の社員が自殺したんですが、事件に巻き込まれた可能性があつて、詳しいことを調べています」

彼が担当ですから、と最初の男が退いた。入れ替わりに前に出た男が、館山ですと名乗った。

「片山興産の業績が落ちていると伺いましたが、事実ですか？」

「それはちよつと……いくら警察でも、お答えできませんよ」

館山が首を振った。何を聞いても、曖昧に言葉を濁じすだけだ。売

上の話だけで構いませんと言うと、まあそうです、と館山が渋々認めた。

「五年前と比べるとかなり……不景気ですからね。ですが、納税はきちんとしています。設備投資に熱心で、本社の裏にある山を買い取って更地さらちにしたり、その他もろもろです。会社には行かれましたか？」

「はい」

「いい会社ですよ。何か問題でも？」

口調が刺々とげとげしかった。余計なお節介やは止めてくれと言わんばかりだ。

「社員数六百人と聞いています。経営状態はどうなんでしょう？」

「そこは警察の管轄じゃないでしょう。お答えできませんよ」

社員が自殺してるんです、と志郎は身を乗り出した。

「ほとんどの社員が敷地内の寮に住んでいるようですが、ブラック企業という噂は聞いていませんか？」

去年、労働基準監督署の調査がありました、と館山が答えた。

「そんな訴えはなかったですよ。会社の規模に比して、社員の給与が低いように思いますが、そこは我々が関知することじゃありません。もういいですか？」

それだけ言って、館山が自分の席に戻った。それ以上どうするこ

ともできず、志郎は税務署を後にした。

15

品川に戻ると、午後七時半になっていた。姫原村は遠すぎる、と京浜急行の改札へ向かいながらつぶやいた。

高村はどのぐらいの割合で姫原村の本社に顔を出していたのか。肉体的な負担は大きかっただろう。

タイミングよく、三崎口行きみさきぐちの電車がホームに停まっていた。乗り込むと、すぐにドアが閉まり、そのまま走りだした。

七つ目の平和島駅で降り、電車の中で調べていた道順で歩くと、二分ほどで寺門建設本社という巨大な看板のかかっているビルの前に出た。

寺門建設は東証一部上場の建設会社だ。門間組もんま、大和工務店と並ぶ、いわゆる中堅ゼネコンの代表的な会社だという知識は志郎にもあった。

ビルに入ると、冷房が怖いぐらいに利いていた。会社を訪問するには遅い時間だが、やむを得ない。

警備室にいた中年の男に声をかけ、片山興産の担当者をお願いしますと名刺を差し出した。うなずいた中年男が何度か内線をかけ、すぐ参りますと言った。

広いウエイティングスペースの隅にあるソファに座って待っていると、太ったワイシャツ姿の男が汗を拭いながら近づいてきた。五十歳ぐらいだろう。

「営業の鈴木と申します」渡された名刺に、課長という肩書があった。オオカワ「警察の方ということですが……」

志郎も名刺を出した。品川桜署ですか、とつぶやいた鈴木が、とりあえず、こちらへどうぞと一階の奥にあった小部屋に入った。

バイヤーが使う部屋なんです、と鈴木が微笑ほしやうを浮かべた。

「それで、何があったんです？」

「片山興産と取引があると伺っています。ちょっと事情があって、調べているんですが……」

「姫原村の片山興産のことですか？ まあ……お付き合いはありません」鈴木が曖昧に言葉を濁した。「わたしが担当しています。でもそんなに深い関係じゃありませんよ」

「どういう会社なんです？」

鈴木が尻ポケットから扇子を抜いて顔を扇ぎ始めた。

「あそこはもともと北島建設きたじまって土建屋だったんです。うちとは、その頃からの付き合いだと聞いています。昭和三十年代には、間違いない取り引きしてましたね。わたしの先輩が担当だったんで、よく話を聞かされたもんです」

「ずいぶん古いですね」

高度成長時代の御伽噺おとぎばなしですよ、と鈴川が片目をつぶった。

「古い連中は今でもその時代のことを懐かしがります……ええと、六年前に社長が代わって、その時に私が担当になったんです。新オーナーが前社長以下役員を総取っ替えしたと聞きました。どうしてそうなったかっていうと……要するに前の社長がコレもんだったんですよ」

鈴川が右の人差し指で頬に線を引いた。しかし、と志郎は首を傾げた。

「いきなり役員を解任するというのは、ずいぶん乱暴な話ですね」
カタギの会社じゃないですからね、と鈴川が声を潜めた。

「多少の無茶なら通ったんじゃないですか？」

「なぜ、そんなことを？」

「わかりませんよ、あの連中のやることは……大きな声じゃ言えませんが、昭和五十年代までこの業界はそんなのばっかりだったんです。今は違いますよ。暴対法だって企業コンプライアンスだってある。でも、昔はねえ……」

話の続きを促した志郎に、北島建設は西多摩にしたまに昔からあった北島組が母体なんです、と鈴川が言った。

「それなりに勢力があったと聞いています。関西のでかい組の傘下さんか

に入って、八王子とか立川とか、そっちの方まで縄張りを広げたんですが、その中のひとつが後の北島建設です。法律的には北島組と無関係なんですけど、実態はね……平成に入った頃には、うちの社もかなり引いてましたよ。危ないから近づくなってことです。そうは言ってもつきあいつてものがありますし、当時うちが八王子の再開発計画に参加していたんで、すっぱり手を切るってわけにもいかなくて……ほどほどにつきあっていたってことでしょうか」

「なるほど。それで？」

「再開発計画がひと段落した頃、先方が旧北島組の連中を辞めさせたんです。株をすべて買ったのは私も聞きました。つもりとしては、もう反社の会社じゃないですよってことだったんでしようけど、こっちはそれまでの繋がりがやしらがなくなっただけで、上の判断で無理にお付き合いしなくてもいいんじゃないかってことに……その後は形だけの付き合いになりました」

「株を買ったのは個人ですか、それとも会社ですか？」

「ニワタコーポレーションって会社です。また暴力団関係だとまずいんで、調べた記憶があります。三多摩の金融関係の会社だったか……いや、パチンコ屋だったかな？ でも、その辺は考えなくてもよかったです」

「なぜですか？」

「片山興産になってから、熱心に営業してくるようなことがなくなつて、それならそれでいいかと……」

「営業してこなくなつた？」

「ゴリ押しとか、仕事を取るために裏で動いたりとか、そういうことはなくなりましたね、と鈴川がうなずいた。

「以前から継続していた仕事とか、フォローの必要がある案件もありますから、それはお願いしてましたし、当然ですけど先方も受けました。だけど、この三年ぐらいは新規の仕事をやってませんね」

「片山興産の高村営業部長がこちらの担当だと聞いてるんですが」
高村さん、と鈴川が太い指を鳴らした。

「そうです、彼がうちの担当です。この二、三年は、月に一、二度ぐらい顔を出してました。真面目な方で、我々も——」

「待ってください。月に一、二度？」

「そんなもんだと思いますよ。営業というより、仕事の発注のためです。資材や車両の手配を頼まれて、私が間に入ったり……そう言えば、他の建設会社を紹介して欲しいと言われたこともありました。転職でも考えていたんですかね？」

「下請けから元請けへ仕事の発注をする……そんなことがあるんですか？」

「建築の材料とか機材とかの手配ですね。片山興産は設備投資に熱

心で、資金も潤沢でした。二年ほど前から、十トントラックやトレーラーの注文が増えて、二十台……いや、三十台以上売ったかな。正直、儲けさせてもらいました」

「北島建設の頃から、トラックは保有していたはずですよ？ それに加えて三十台というのは、多くありませんか？」

「片山興産の規模から言うと、確かに多いでしょうね。でも、噂じや他所とも取引をしてたらしいですよ。ずいぶん攻めるなと思いましたが、高村さんに聞いたら、社長の方針で業務を拡大していると言っていました。いつまでも子会社孫会社じや、限界がありますからね。他にもいろいろ手配を頼まりましたよ」

「どんな物です？」

建設用の重機とか、と鈴川が手帳の頁をめくった。

「クレーンとか、そういう大型車両です。特殊トラックと呼ばれる車種も五台売ってますね。そこまでの必要はないでしょ、と言ったこともあります。ユンボやブルドーザーならともかく、ピックアップクレーンとかドラグショベルなんかは、普通の業者だと使えませんからね。でも、こっちも商売ですから、欲しいと言われれば売りますよ。経営方針なら、口を出すわけにもいきませんし」

「そういう特殊車両は高額なはずですが、資金はどこから出ていたんでしょう。潤沢じゆんたくにあったとおっしゃっていましたが、自前で用意

したんですか？」

「ニワタコーポレーションですよ。思い出しましたが、あそこはパチンコのチェーン店、金融業、手広くやってきました。三多摩でアミューズメント関係の会社を別に作ったり……でも、無理があったんでしょう。ずいぶん前に経営破綻はたんしています。となると、やっぱり銀行から資金を調達してたのかな？」

「親会社が倒産するような会社と取引して、大丈夫なんですか？」

「うちも取引先の財務調査はやるんですけど」片山興産は北島建設が社名変更した会社なんで、と鈴村が曖昧に笑った。「あんまり突っ込めないんです。昔からの付き合いもありますしね。支払いはきちんとしましたから、問題はなかったですよ」

「大手ゼネコンの系列に入ったとか、そういうことではないんですか？」

「どうなんでしょうね。大手と呼ばれるゼネコンは、片手ぐらいしかないんですよ。片山興産がどこかの系列に入ったという話は聞いてません。どこかの下請けではあったはずなんですけど……」

一時間ほど鈴川の話聞いて、寺門建設を出た。志郎の胸に、うつすらと疑惑の影が浮かんでいた。

泉岳寺せんがくじの自宅に戻ったのは、夜九時過ぎだった。コンビニで買った弁当をレンジで温めながら、警視庁に勤務していた時、親しかった鴨川かもがわという警部補の番号をスマホで捜した。

一年前に定年で退職していたが、たまに連絡を取り合い、飲みに行く仲だ。遠慮えんりよなく画面にタッチした。

どうした、と鴨川の張りのある声スピーカーホンから流れ出した。

「聞いたぞ。今時被疑者を殴って謹慎になる奴はそういない。立派なもんだ」

「からかわないください……馬鹿なことをしました」

鴨川の早耳は昔から有名だった。退職してからも、噂話の収集に余念がないようだ。それだけのコネがあるのは、志郎も知っていた。

「妹さんのことだが……大変だったな」鴨川の声が低くなった。「事故ってというのは辛いな……葬式はどうするんだ？」

「署の総務が手配してくれています。まだ遺体が病院なんで、戻ってくれば葬式ってことになるんでしょう」

「そうか……それで、何かあったのか？」

「鴨さん、西多摩にあった北島組のことは知ってますか？ もう解

散しているようなんですが」

「ずいぶん懐かしい名前だな」煙草たばこを吸っているのか、鴨川が深く息を吐いた。「おれの若い頃は、ずいぶん暴れ回っていたがね。古い組だよ。戦前からあったんじゃないか？ もとはテキヤだったはずだ」

後ろでレンジが鳴ったが、詳しく教えてくださいと志郎は言った。

「広域暴力団砥川組の傘下に入ったのは、昭和四十年だったと思う」
四代目砥川弦蔵とがわけんぞうから杯さかずきをもらったんだ、と鴨川が淀みなく話し始めた。「砥川組は関西の組織だから、東京に取っ掛かりが欲しい時期でな。テキヤ、愚連隊ぐれんたい、博徒はくと、そういった連中と手を結んで、勢力拡大に努めた。北島組もそのひとつだ。砥川組は敵対する組織とは徹底的に抗争するが、一度関係を結べばそれなりに扱う。北島組も砥川組がバックについたことで勢力を大きく広げた。一時は西多摩全体を牛耳っていたぐらいだ。八王子から立川ぐらいまでかな」

「その辺りが縄張りだった？ かなり広いですね」

頭の中にある東京の地図を広げた。三多摩地区でそれだけの勢力があったとすれば、組としては大きいと考えていい。

「八王子に本家を構えていてな。由緒正しいテキヤ組織だよ。組員も数百人ほどいたはずだ。なかなかの勢いだったよ」

鴨川の声のため息が混じったが、昔を懐かしんでいるようだった。

「何をシノギにしていたんですか？」

「おれが知ってる頃は、もう株式会社になってたな。二代目が頭の切れる男で、その辺は早かったんだ。三多摩の飲食店におしぼりや花を納入したり、他の暴力団から護るとい^{まも}う名目でみかじめ料を取ったり、古い手も使ってたよ。暴対法なんかなかった頃の話だ」

「他には？」

「手配師や金融、建設、土木、そんなとこじゃなかったか？ 昔^{かたぎ}氣質なところがあつて、悪いヤクザじゃなかった。三多摩だし、無茶をしなくてもよかつたつてこともあるんだろう」

「解散したのは、暴対法の関係ですか？」

「結局はそうだが、時代の流れにうまく乗れなかったんだよ。二代目が死んで抑えが利かなくなり、幹部が独立して、クスリとか売春とか、非合法的なシノギに手を出してたが、三代目はそういう連中をまとめきれなかった。組員が少なくなつて、暴対法制定前から、実質的には暴力団と言えなくなつていたんだ」

「北島建設という会社を経営していたはずなんですが」

「そうかもしれない。組織として弱体化した後も、何だかんだ三、四社はやってたはずだ。昔も今も、暴力団は土建業と相性がいいからな」

「いつ組を解散したんですか？」

「十年は経っていないんじゃないか？ 時代についていけなくなつたヤクザはみじめだよ……最後に建設会社を売つたと聞いた覚えがある。それが北島建設かもしれん」

「そうだと思います」

「ずいぶん古い名前が出てきて、べらべら喋ちまったが、あそこがどうしたっていうんだ？ もうとつくに終わつてる組だし、残つていた連中も引退したはずだ」

「ちよつと引つ掛かることがあつて……」

深くは聞かんが、と鴨川が小さく咳をした。

「何かあれば言ってくれ。橋口、お前のことは知ってる。たまにわけのわからんことをするのな……。何でも一人でやろうとするな。わかつたか？」

何もしませんよ、と志郎は笑つた。

「謹慎中なんです。おとなしくしてますよ……ところで、解散した時の組長について、知ってることはありませんか？」

「調べればわかるかもしれんが……引退したのは確かだ。銀座の近くにマンションを買つたとか、そんな噂を聞いたことがある」

「名前は？」

「覚えてない。どうする？ 調べてみるか？」

お願いしますと言って、電話を切つた。弁当をレンジから取り出

したが、すっかり冷えていた。

(続く)